

山村暮鳥「風景」の分析

阿 満 誠 一

一

「風景」の収められている、山村暮鳥の第二詩集『聖三稜玻璃』は大正四年十二月、人魚詩社から出版された。出版後の周囲の反応を藤原定氏は次のように紹介している。^(注1)

この詩集は発刊当時たいへんな論議をかもしたらしい。「全く意味のない邪気に充ちた悪戯にすぎない」(柳沢健) というような無理解な非難が多く、暮鳥自身も「自分の芸術に対する悪評はその秋に於て極度に達した。或る日自分は卒倒した。」と回想している。

けれども萩原朔太郎は「氏の詩篇は西洋の未来派の詩

のような不徹底な拙いものではなく、氏独特の驚くべき表現と独創をもった立派な芸術である」と前衛芸術のいち早い先取として称讃し、詩集中の「だんす」一篇をとりあげて適切な解説をこころみている。またのちに朔太郎は絵画のキュービズムに通じるものだととして、暮鳥を「日本立体詩派の祖」であるとし、しかも形式上のそれではなく「精神的な立体詩」だとしている。

『聖三稜玻璃』を世に送り出すにあたって、暮鳥には期するものがあつた。発刊に先立つこと三ヶ月前の九月十五日の消印を有する手紙の中に「小生は今の文壇乃至思想界のために(注2)ばくれつだん(注3)(注：傍点原文)を製造している。」との一節が記されていることにそれがうかがえる。また「造本も思い切った豪華な総革製」にしたこと、(注4) 広告文に「この廃類せる世界に於いて唯一新鮮なる生命イルミネエションの宝石より美しき第一詩集をお届けすると号した」ことなどからも同様に、暮鳥の並々ならぬ自負の念と意気込みが感じられるのである。しかし、すでに見たように、周囲の反応は必ずしも暮鳥の自負心を満足させるものばかりではなかった。しかも、彼の心中では好意的な評よりも、非難の方が大映しされたのであろう。「自分の芸術に対する悪評はその秋に於て極度に達し

た。或る日自分は卒倒した。」との回想がそれを物語っている。しかし、無理解や悪評は暮鳥に全く予想されていなかったわけではない。前述の手紙の中には「此の詩集、今世紀にはあまりに早き出現である。」と記されている。たしかに、『聖三稜玻璃』が「物議をかもし」、「無理解な非難」の対象になったのも無理はないと思われる面がある。たとえば、同詩集の冒頭に据えられた「嚙語」と題する詩は、表紙をめくった読者を驚かし、当惑させるのに十分すぎたのではあるまいか。いまその詩を掲げる。

嚙 語

竊盜金魚

強盜喇叭

恐喝胡弓

賭博ねこ

詐欺更紗

瀆職天鷲絨

姦淫林檎

傷害雲雀

殺人ちゆりつぶ

墮胎陰影

騷擾ゆき

放火まるめろ

誘拐かすてえら。

罪名をあらわす、漢字二字から成る語を各行の頭に据え、それらに多種多様な名詞を付けることで全体が構成されている作品であるが、上下のつながりの必然性は皆目検討がつかない。いや、つながりを求めること自体が無意味なこととして作者から拒否されているのかもしれない。なにしろ題が「嚙語」(「ねごと・うわごと)なのであるから…。この詩を『聖三稜玻璃』の冒頭に据えたことは、暮鳥の挑戦的とも言うべき姿勢を示すものだろう。

二

『聖三稜玻璃』に収められている詩は、もちろん、「嚙語」のように殆どが漢字表記のものとは限らない。その多くは漢字ひらがな混じりで表記されており、その点、表記の面で鬼面人を驚かす手法で詩集全体を通してしているわけではない。しかし、表記に着目した時、「嚙語」とは対極に位置するものと

して、本文全てがひらがなで表記された「風景」という詩の存在が浮び上がる。いまその全文を掲げる。

風景

純銀もざいく

いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
かすかなるむぎぶえ
いちめんのなののはな

いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな

いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
ひばりのおしやべり
いちめんのなののはな

いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
やめるはひるのつき
いちめんのなののはな

一見したところ、同じ作者の「雲」^(注5)を連想させる、ほのぼのとした印象を与える詩である。しかし、本文全てがひらがなで表記されていること、各連がいずれも九行から成り、八行目のみ「いちめんのなののはな」以外のフレーズになっていること、加えて各行とも九文字であるといった詩の構成に着目するとき、単に春のほのぼのとした雰囲気を醸し出すだけ

が暮鳥のねらいだったとは考えられない。そこには『聖三稜玻璃』で彼が試みた様々な手法のいくつかが隠されていると見るべきであろう。

三

「風景」の本文がひらがなで書かれていることの効果および意味はいくつか考えられるが、まず、詩全体の基調の一つである柔らかさの形成にあずかっている事実を指摘しておきたい。もし「いちめんのなのはな」が、漢字ひらがな混じりで「一面の菜の花」と表記されていたら、容易に意味が把握できるものの、柔らかい感触は失われて、やや硬い印象を与えるだろう。その意味で「囁語」の漢字表記は、罪名の持つまがまがしさにふさわしいものとして選択されたと言える。いっぽう、カタカナで「イチメンノナノハナ」とするとカタカナの持つとげとげしさが全面に出してしまい、やはり、柔らかい印象は生まれない。漢字・カタカナと比べたとき、ひらがなは角のとれた丸っこい文字であることから、視覚的に柔らかい印象を与えるのである。そして、その柔らかさは、菜の花の咲く春にふさわしいものとして作者が選んだと考えられるのである。

もう一つ、柔らかさに劣らず重要な「風景」の基調として指摘しておきたいのは明るさである。明るさはいくつかの要素によって醸し出される。その要素として、まず何よりも「いちめんのなのはな」である事実を挙げねばなるまい。見渡すかぎり黄色い菜の花が咲き誇っているのだから明るくないはずはない。しかも「いちめんのなのはな」の繰り返しいやが上にも明るさを強調する。各行の終わりが「なのはな」と、ア段の音が多用されている事実も明るさを感じさせる隠し味の働きをしている。「いちめんのなのはな」で表される光景は、明るさを「風景」の基調とするために作者暮鳥が注意深く選んだ仮想現実であるといわねばならない。明るさに結びつくものはまだある。各連の八行目がそれである。まず第一連の「かすかなるむぎぶえ」は、屋外で誰かが麦笛を吹いている以上、雨天ではないであろうことを推測させ、つぎに第二連で、空では雲雀がさえずっていること、さらに第三連で昼間の月が描き出されることによって晴天であることが暗黙の了解となるよう仕組まれている。なお、執拗ともいえる「いちめんのなのはな」の繰り返しは明るさを醸し出す働きをするにとどまらない。繰り返すことによって見渡すかぎりの菜の花畑が強調されると同時に、読者に「いちめんのなのはな」以外の光景を思い描くことを許さない働きをも有するもので

あることを指摘しておきたい。

ところでいずれの連も八行目が他のフレーズと異なっているのは容易に気付く事実である。このことの意味については山室静氏に「単調を避けている」との指摘がある。^(注6) たしかに、そういう側面があることは否定できないが、単調を避けるためだけなら、「いちめんのなのはな」以外のフレーズであれば構わないはずである。それが「かすかなるむぎぶえ」であり「ひばりのおしやべり」であり「やめるはひるのつき」であったのはそれなりの必然性があつたはずである。しかも作者はそれら三つのフレーズが目立つように配置している。というのは、七行目まで「いちめんのなのはな」と続けば、読者は、最後まで「いちめんのなのはな」と続くことを予想するからである。その予想を裏切るかのように、突然、異なる一行が出現するのであるから、その一行が目立たないはずはあまるまい。しかも、各連が九行×九文字で構成されているために、どの連も、右上から左下に読み進むと、「いちめんのなのはな」と読めそうで読めないという仕掛けになっている。左上から右下に向かって読もうとしても事情は同じである。江戸時代の言語遊戯の一つである擗掛を想起させる手法を利用して、斜めに読むとき、八行目に、「いちめんのなのはな」と読むことを妨害させる一行を差し挟むことによって、みずか

らの存在を主張させているのである。なぜ、そうまでして強調したかったのだろうか。「むぎぶえ」の音と「ひばり」のさえずりを点検することによって、視覚的な要素の濃い詩に聴覚的な要素でアクセントをつけたとも考えられるが、それだけでは視覚的な性質を有する「ひるのつき」が存在することの説明としては一貫性を持ち得ない。そこで、改めて三つのフレーズを検討してみると面白い事実に突き当たる。それは、作者の視線が下から上へ移動する、垂直の動きを見せていることである。「いちめんのなのはな」の繰り返しだが、視線の動きを水平方向に限定していたのは全く異なる視線の動きである。「むぎぶえ」の音が聞こえた時、作者は「むぎぶえ」の主の姿を求めて、音のする方向に目をやったかもしれない。そうでないとしても、少なくともこの時点では視線が上を向くことはない。ところが「ひばり」のさえずりは作者の視線を上に向けさせるのに十分であり、次いで、視線は「ひるのつき」へと更に引き上げられ、そこで止まるのである。作者の視線だけではない。読者の意識上の視線も上へ上へと引き上げられ、ついには「ひるのつき」に釘づけにされるという仕掛けになっていると言える。どうやら作者は「やめるはひるのつき」という一行に読者の視線を集めたかたと考えられる。そう考えるとき、昼間の白っぽい月を「やめる」と形

容した意味は大きいだろう。この一語によって「風景」は単なる叙景詩の衣を脱ぎ捨てることになると言ってよい。昼間の白く見える月を、事実そのままに「しろいはひるのつき」と言っても音数は同じなのに、あえて「やめる」と形容したのは、そこに作者暮鳥の心的状況が反映しているからではないか。うららかな春のある日、あたり一面菜の花が咲き乱れている「風景」は、暮鳥を取り巻く外界の状況を象徴するものである。そして、その外界は、作者を除外するように働いてはいない。詩全体の基調の一つとしてあった柔らかさは外界が作者を拒否するとげとげしいものではなかったことを物語っている。むしろ作者の方が外界に対して違和感を覚えていると考えるべきだろう。外界の明るさ（これも詩の基調を成すことは先に指摘した）とは裏腹に、彼の心象「風景」は何かの悩みのために決して明るくはなかった、言い換えれば、外界（現実）が明るすぎるがゆえに溶け込むことができなかつたと思われる。漢字で表記された「風景」という題には、以上の、相容れない二つの風景の意味がこめられているのである。

四

ひらがなばかりで書かれているため、一見したところ、幼い印象を与えかねない「風景」であるが、実際に分析を試みると、すみずみまで計算しつくされた作品であるという印象を強くする。したがって、副題の「純銀もざいく」も当然考察の対象としなければならないのであるが、今は、述べるほどのものを持ち合わせていない。各連に、他と異なるフレーズが行ずつ差し挟まれていることをもって「もざいく」としたと考えてみたりもするが、なぜ「純銀」なのかはいまだ手がかりすらつかめていない。他日を期したい。

注1 「山村暮鳥詩集」（彌生書房）解説。

注2 「暮鳥伝」小山茂市・近代作家研究叢書88。

注3 「日本の詩歌」13所収の山室静氏の解説による。

注4 注3に同じ。

注5 おうい雲よ／ゆうゆうと／馬鹿にのんきさうぢやないか／どこまで
ゆくんだ／ずつと磐城平の方までゆくんか

注6 注3に同じ。